

ホーリネス教会の礼拝

——その歴史と神学——

高橋 政雄

はじめに

四十年くらい昔のことだが、ホーリネス教会の礼拝のあり方に、素朴な疑問を感じはじめた、というより、教会においても、神学校においても、礼拝について教えられたことがなかったのである。現在は、かなり礼拝に対する関心が高まってきており、そんなことはないと思うが。

礼拝は守っていても、礼拝の意味とか、礼拝のプログラムが何故こうなっているのか、まったく知らなかったのである。何故ここで賛美をするのか、何故交読文を読むのか。何故司式者と会衆が、交互に読むのか、交読文の神学的な意味は、何なのか。歴史的には、何時頃から、どこでそのようなことが行なわれるようになったのか、というようなこと等を、全く知らないで、ただ惰性的に礼拝をしていたのである。礼拝をやめてしまったら、教会はもはや教会でなくなってしまうほど、大切な集会であるはずの礼拝の意味について、何も知らず、何の疑問をもたな

いで、ただ惰性的に守っているということ自体がおかしいと思った。

しかし、これはホーリネス教会だけの問題ではなかったようである。故竹森満佐一師は、東京神学大学の最終講義のなかで、次のように述べておられる。

「礼拝をしながら、そして、その内容と形を整えながら、まだ、礼拝とは何か、という問題が、ほんとうには分かっていなかったのである。それなら、どうして、礼拝の問題に立ちいたったか、だれが教えてくれたかと考えてみても、思い当たる人はないのである。しかし、よく考えてみるとそれは、やはりカルヴァンなのである。カルヴァンから直接に礼拝論を教えられはしなかったが、自分が訳した彼の連続講義から、考えさせられ間接に教えられたのである。」⁽¹⁾

日本の諸教会は、礼拝論をふくめて実践神学に対して、関心がうすいといわれてきた。そんなわけで、礼拝についての本を集めて読んだり、礼拝を重んじていると思われるいろいろな教会の礼拝に、実際に参加してみたりした。また日本ルーテル神学大学や東京神学大学の大学院で、礼拝学を学ばせていただいて、すこしは分かるようになったかな、と思う。

こうして学んでみて思うことは、礼拝学というのは、キリスト教の学問の要のような存在だということである。あらゆるキリスト教の学問が礼拝学のためにある、と言っても、過言でないと思う。またそうでなければならぬと思う。日本ルーテル神学大学では、卒業のきまっている四年生の学生に対して、そして、東京神学大学では、修士課程の学生に礼拝学を教えている。

これらの大学では、学生が聖書学とか、神学、教会史などを、ひと通り勉強した段階で、礼拝学を教えているのである。これはたいへん大事なことだと思う。聖書も神学も教会の歴史も充分に知らないで、礼拝学を学ぼうとすると、礼拝学はもともと実践的な学問であるので、実際の、便宜的な方向に走ってしまう危険性がある。どうしたら人がたくさん集まるか、どうしたら会衆が喜んで集まるような礼拝ができるか、というようなことのほうに、関心が集まりやすい。現実にはアメリカの教会の中には、ショウのような礼拝が行なわれていると聞く。

そうならないために、まず聖書学とか、神学、教会史などの基本的な知識をしっかり教えた段階で、これらの大学では、学生に礼拝学を教えているのだと思われる。

われわれが礼拝学を学んでいく上でも、この手続きはふんでいくべきだと思う。この小論では、おもにホーリネス教会の礼拝の歴史を中心に述べるのであるが、礼拝の神学にも、すこし触れさせていたただきたいと思っている。

礼拝学の本は、それぞれその属する教派的な背景のもとに書かれている。だから、片寄った見方におちいらないためにも、いろいろなものを読んでみる必要があると思う。関心のある方のために、巻末に参考文献を少しあげておいた。私見ではあるが、ホーリネス教会の礼拝を理解していただくために、少しでもお役にたてば、幸いと思う。

ホーリネス教会の礼拝

はじめに、この小論の中で、「ホーリネス教会」と呼んでいるのは、戦後まもなく再建された日本ホーリネス教団と、そのルーツというか、その前身である中田重治によって創立された旧ホーリネス教会を意味する。戦前のある時期に、また戦後、旧ホーリネス教会から分かれていったホーリネス諸派のことを指すのではないことを、あらか

じめ申し上げておきたい。

(一) 礼拝学におけるホーリネス教会の位置

キリスト教の各派を、礼拝学の面からグループ分けすると、次の三つに分類できる。

(a) 典礼派

祈禱書、教会歴等によって礼拝し、聖餐式を重んじて毎週行なう教会。

ギリシャ正教会、カトリック、聖公会、ルーテル教会、初期のメソジスト教会等。

R・M・スピールマンは、リタージカルな教会の特徴を二つあげている。第一は洗礼式、結婚式、葬式を含めて礼拝の様式が定まっている。第二に、それらの儀式と内容が、権威ある人物や教団によって定められ、礼拝のスタンダードとして全ての教会によって行なわれている。⁽²⁾

(b) 準典礼派

典礼派ほどではないが、礼拝の神学をもち、聖餐式を重んじ、リタージカルな礼拝を守る教会。

改革派、組合教会（ピューリタン系）、メソジスト派、一部のバプテスト派。

(c) 自由派

「説教だけが重んじられて、他の礼拝を成立させる諸要素は、全く自由な、ほとんど無形式と言ってよいほどに伝統的なものをほとんど捨て去った教会。フレンド派、ホーリネス系諸教派」⁽³⁾

前記のスピールマンは、自由教会の特徴を三つあげている。第一は、礼拝をどのように守るかは、地域の教会と牧師によって決定される。定まった礼拝様式というものをもたない。祈禱文は使用せず、自由に祈る。

第二は、これらの教会は聖書の言葉を唯一の権威として信じる。聖書に基づいた長い説教が中心であり、礼拝のほとんどが唯一の特徴でさえある。

第三は、自由教会も洗礼や聖餐式を守る。しかし、これらはごく簡単な儀式によって行なわれる。聖餐式は年に四回ほど行なわれる。年に一度という教会も少なくない。⁽⁴⁾

『キリスト教礼拝辞典』および由木康氏の『礼拝学概論』等では、ホーリネス教会を自由派として位置づけている。われわれの礼拝が、他派の人たちからそのように見られているのを知ったとき、残念に思った。しかし、このことを謙虚に受けとめて、われわれの礼拝を聖書的に近づけ、よりよいものにしていきたいと心から願っている。ただ、この『キリスト教礼拝辞典』が書かれた当時のホーリネス教会の礼拝と、今日のホーリネス教会の礼拝は、聖餐式を重んじることなどの点で、かなり違ってきていると言える。

二、中田重治と戦前のホーリネス教会の礼拝

プロテスタント教会は、創立者の信仰から強い影響を受けていると言われる。ホーリネス教会も例外ではなく、創立者の中田重治の信仰から大きな影響を受けていると言える。礼拝に関しても同様であろう。

中田重治は、英国国教会の影響を受けていた弘前メソジスト教会の出身者である。信仰はもちろん、礼拝についても当然メソジスト的な影響を受けていたと思われるので、当初はリタージカルな礼拝の考え方をもっていた時期もあったのではないか。しかし、アメリカのムーデー聖書学院で学んでいた間に、そこで聖霊経験をして、礼拝についての考え方も、そこから強い影響を受けたと思われる。帰国して、しばらく巡回伝道をしていたが、まもなく

メソジスト教会を脱会して、神田に中央福音伝道館を設立して伝道を開始する。一九〇一年二月（明治三十四年）である。

戦前のホーリネス教会の礼拝の様式がどのようなものであったのかは、よく分からない。「中田重治伝」にも、礼拝については何も触れられていない。

僧侶から牧師になった亀谷凌雲氏が、大正末期のホーリネス教会の集会に出られたときの印象を、「仏教からキリストへ」という本の中で述べておられるので、そのまま引用させていただきます。

「ある信仰の友を介してホーリネス教会のあることを知った。これまで接した教会とは、ようすがだいぶ相違している。単純である。熱烈である。粗野ではあるが、靈気にあふれている。その強調するところは四重の福音である。贖罪、すなわちキリストの宝血による罪人の完全なる救いを、率直に信ずるのだ。聖潔、すなわち聖霊とみことばによる聖化を信ずるのである。再臨、すなわちキリストの具体的来臨を、文字どおり信ずるのだ。神癒、すなわち身体をまで、今もキリストが愛して病より、信じて祈る者をいやしたもうことを信ずるのである。みな聖書そのままの信仰。行き過ぎはあるが、これさえ改めれば、とても神直接の深い恩寵に浴して、旧新約聖書にあふれる神の靈力にあずかれるのだ。そこで歌われるリバイバル聖歌は、文学的でなく、古典的でないかも知れんが、直接活けるキリストに接する心地がするのだ。深い神学の素地を欠くかも知れぬが、民衆的である。」⁶⁾

亀谷氏の出られたのは聖会だと思いが、大正末期から昭和のはじめのホーリネス教会の信仰や、集会の模様が、

よく描かれていると思う。自由主義神学の盛んであった時代で、キリスト教の信仰が退廃していた時代に、こういう教会があったということは、たいへん意味があったと言えると思う。

また、戦前のホーリネス教会のことについて詳しい、山崎鷺夫（東京聖書学院名誉教授）によると、戦前のホーリネス教会の礼拝は、戦後の昭和二十年代のホーリネス教会の礼拝とほとんど変わらなかったようである。当時の教職の大部分は、戦前に東京聖書学院を出た人たちであったので、当然、礼拝の様式も戦前のものを踏襲していたと思う。山崎鷺夫の談話によると、戦前のホーリネス教会の礼拝の特徴は、靈的、伝道的、自由な雰囲気であったといわれる。

中田重治は、礼拝のプログラムなどをつくることに反対であった。聖歌を選ぶにしても、前もって選ぶようなことはせず、集会の時になって司会者が歌を選ぶのである。聖霊の導きとか、その働きを大事にしたのだと思われる。まことにオルガニスト泣かせてあったと、山崎鷺夫は語る。今日でも、聖会などでは同様だと思う。

中田重治が活動していた時代は、合理主義思想とか自由主義神学が盛んな時代で、日本の教会の信仰的退廃の時代であったといえる。そういう時代の一九一九年十一月（大正八年）、つづいて一九三〇年五月（昭和五年）に、ホーリネス教会にリバイバルがおこった。一九三〇年には、一年間の受洗者は四三二一名で、それは今日の日本ホーリネス教団の十年間の受洗者数に匹敵する。まさに爆発的教会成長である。

その当時のホーリネス教会が、もし今日のようなリタージカルな礼拝を守っていたとしたら、その時あのようなリバイバルが果たして起こっていたかどうか、分からない。それでもリバイバルは起こっていたかも知れないし、起こらなかったかも知れない。リタージカルなものは、伝統的なものを守り伝えていくにはよい。しかし、新しいものを生み出していくのは難しいのではないかと思う。

その頃のホーリネス教会の礼拝の中には、その新しいものを生み出す力があつたように思う。当時の礼拝がどのようなものであつたか、正確に知ることはできないが、おそらく内容は、賛美、祈り、そして長い説教が中心の、今日の聖会と同じようなものであつたと思われる。リタージュカルな礼拝ではなかつたかも知れないが、聖霊が力強く働かれた生命のあふれた集会であつたと思われる。

ユダヤ教の信仰が偶像礼拝によって退廃していた時代に、エリヤ、エリシャ、アモスなどの預言者たちによって、わずかに純粹な信仰が保たれ生命が与えられていた。体制側からみればエリヤたちは異端児であつた。しかし、彼らの存在した意義は大きい。

由木康氏は、「キリスト教の礼拝には、預言者的傾向と祭司的傾向がある」と述べている。^⑥正しい信仰と礼拝が保たれていくためには、その二つの面がバランスよく保たれていくことが大事だと思ふ。礼拝のリタージュカルな面（祭司的面）は、大切である。しかし、預言者的な面、すなわち生命を与えるような神のことは力強く語るということは、さらに大切なことであると言える。当時の中田重治のホーリネス教会の礼拝には、自由主義神学を信奉する教会に欠けていたものがあつたと言つてよいと思ふ。

△ししがほえる、だれが恐れないでいられよう。主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう▽

(アモス三・八)

原野でライオンに出会つたら、それだけでも人は震え上がると思ふ。まして、そのライオンが吠えたら、人は肝を潰すだろう。そのように力強く神のことはを語る説教者が、今の時代、あまり見られないのではないか。当時の

ホーリネス教会にはリタージュカルなものではなかつたかも知れない。しかし、生命を与える預言者的な神のことは説教があつたと思ふ。それが一年間で四千人をこえる受洗者をおこしたのではないか。こういう伝統は後のホーリネス教会も受け継いでいくべきである。

初期のホーリネス教会の礼拝の様式は、ピューリタンの影響よりもむしろ、十九世紀以来のリバイバル集会の影響を、より強く受けていると思われる。儀式的要素のすくない、聖霊による燃えるような、説教中心の集会であつたと思われる。それは礼拝という名前と呼ばれるリバイバル集会であり、聖会だつたのではないか。ホーリネス教会は、神学的にはメソジストに属するが、礼拝様式は十九世紀のリバイバルの強い影響を受けているのである。

戦前のことはよく知らないが、戦後、昭和二十年代のホーリネス教会の礼拝においては、聖餐式はほとんど行なわれなかつたし、礼拝を成立させるものは、説教、祈り、賛美以外は、伝統的なものは何も持たなかつたのである。

三、戦後のホーリネス教会の礼拝

戦後間もないころのホーリネス教会の集会は、礼拝も伝道会も祈禱会もプログラムはほとんど同じで、伝道会には証しがあり、祈禱会は他の集会より少し祈りがおおい程度で、どの集会も内容的にはほとんど変わりがなかつた。礼拝と他の集会との区別がはつきりしていなかつたのである。しかし、これはホーリネス教会だけの問題ではなかつたようである。たとえば故竹森満佐一師は、「その当時は、礼拝ということは言っていたが、礼拝と集会ということが、はつきり区別がついていなかつたのではないかと思ふ」と、述べている。

ホーリネス教会の礼拝は、非常に伝道的で自由な雰囲気特徴であつた。日曜日の午前の集会を、礼拝と呼んで

いたにすぎなかった。当時使われていたりバイブル聖歌には、使徒信条も交読文もついていなかったたのである。そのためか、礼拝で交読文を唱えたり、使徒信条を告白するということはなかった。また中田重治は、礼拝にプログラムを作ることに反対であったと、山崎鷲夫は述べている。自由主義神学の強い影響を受けていた当時の教会の礼拝様式を取り入れることを、中田重治は好まなかったたのであろう。

戦後のホーリネス教会の礼拝のプログラムは、聖会の影響をかなり受けていた。賛美を二つ続けて歌うとか、座ったまま、賛美しながら、献金を集めるとか、司会者が聖歌の意味を説明したり、聖会でやっているようなことを、礼拝でもしていた。当時の牧師はほとんど聖書学院で礼拝学を学ぶということではなかったから、聖会のプログラムを無意識のうちにまねていたのであろう。筆者もその一人であった。

一九五八年頃(昭和三十三年)、ホーリネス教会の礼拝に変化が起こり始めた。礼拝の中で、使徒信条を告白したり、交読文が読まれるようになったのである。それは当時礼拝で使用されていた『リバイバル聖歌』が改訂されて、新しく『聖歌』が発行された。それには、使徒信条や、主の祈り、交読文などが掲載されていた。別に教団総会で、使徒信条や交読文の使用を決定した訳ではないが、どこの教会からともなく、ごく自然に、礼拝で使徒信条や交読文が使用され始めた。

昭和三十年代にはいると、ホーリネス教会に、もう一つの変化が起こり始めた。米国に留学していた若い教職が、つぎつぎと帰国して東京聖書学院の教師となり、ホーリネス教会はアカデミックになってきた。

そういう変化が、礼拝の面にも現れてきたと言える。典礼化とまではいかないが、聖餐式なども多くの教会で行なわれるようになり、礼拝様式が整えられてきた。後で述べるように、ほんの二、三の教会だが、礼拝が式文によってすすめられるようになってきた。結婚式や葬式で式文が用いられることはあっても、礼拝全体が式文によって進

められるということは、これまで全くなかった。中田重治は、そのような礼拝のあり方に積極的に反対であったたのである。別に式文を使って礼拝をすることが悪いこととは思わないが、そのように儀式的に礼拝をすすめていくと、伝道の面ではマイナスになるのではないかと思われる。聖霊の自由な働きと導きが、妨げられると思われるからである。

戦前戦後を通じて、ホーリネス教会の大きな特徴の一つは、熱心に伝道を行うことである。霊的で、伝道的で、自由な雰囲気の特徴のホーリネスの礼拝が、式文で行なわれているというのは、中田重治の時代には、とても考えられないことであった。

迫害下にあった初代教会の礼拝の様式は、時間も短く、シンプルなものであったと考えられる。礼拝様式の儀式化が複雑に進んできたのは、キリスト教がローマ帝国で公認され、それと共に宮廷儀式の影響が強くなってきてからのことであると思われる。

筆者が、ホーリネス教会の礼拝で問題にしたいのは、礼拝のプログラムに聖書的な神学をもつことで、礼拝を儀式化することではない。礼拝の神学が聖書的に確立されてくれば、礼拝様式は自ずから整えられてくると思う。

四、礼拝意識調査にみる今日のホーリネス教会の礼拝

一九九一年十月、日本ホーリネス教団の一七〇近い教会に、礼拝意識調査のためにアンケートを依頼した。九七通の応答があった。

そのアンケートは、①聖餐式、②聖餐卓、③式文、④カウン、⑤礼拝についての学習状態、⑥プログラム等につ